

<研究ノート>

神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝 －翻訳と註解(2)－

小松 進*

The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV :
Translation into Japanese and Commentaries(2)

Susumu KOMATSU*

1. はじめに

自叙伝がいまだ独自の文学形態として自立していなかった中世ヨーロッパにおいて、神聖ローマ皇帝カール4世の文学的自画像はその特異な性格ゆえに格別異彩を放っている。その作品で、カールが本来意図したのは、自分の王位を継ぐ嗣子たちにキリスト教徒としてあるべき君主のあり方を説く君主鑑を著わすことであった。君主鑑は中世ヨーロッパにおいて文筆家が自分の政治的主張を表明する代表的な文書形態の一つとして長い伝統をもち、カールもまたこの伝来の表現形態を踏襲して嗣子たちに遺訓を残そうとした。しかし、この伝統的な文書形態にカールはまったく新しい要素を付け加えることによって、君主鑑の構造を一変させてしまった。君主鑑という伝来の枠組みの中で、カールは自らの歩んだ人生を綴り、それを自分の言説に対する事例として提示したのである。中世の君主鑑で、このような構造をした作品はほかに類例がな

い。君主自ら筆を執ったという点において、また、君主鑑でありながらその枠組みを越えて自分の伝記的肖像を描いたという点において、カールは独創的であった。しかも、その自画像には、14世紀前半のヨーロッパ各地で繰り広げられた権力闘争や政略結婚、それにまつわる権謀術数の数々が描き出されるのみならず、夢で見た幻によりカールが将来起こる出来事の予言をするという幻視体験、あるいは、夜中にカールの寝室で器物が勝手に跳ね回るポルター・ガイストのような超常現象などの不可思議な物語が挿入され、多彩なエピソードがちりばめられたその記述内容は、君主鑑という本来の枠組みをかえって目立たないものにし、むしろ、カールの自画像が、君主鑑とは無関係の独立した文学作品であるかのような印象を与える。しかし、いかに精彩に富んだ筆致で活写されようとも、その自画像で描かれる人生は、カールにとって、「空しくして愚にもつかぬ人生」(vana et stulta vita)¹⁾であり、それ自体意味を持たず、生そのものの全体の半面でしかなか

* 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

た。このことを知るには、やはりその自画像の枠組みをなすカールの言説に立ち返り、生に関するカールの表象全体を浮き彫りにする必要がある。

生に関するカールの考察は自叙伝冒頭の第1章でなされ、この章は前回すでに訳出した。だが、生に関するカールの表象は、この冒頭の章だけでは完結しない。自分の生涯を辿っていく叙述の途中で、前後の脈略とは無関係に、カールは唐突に夢の中で始めた聖書積義を差し挟んだ。それは自叙伝の第11章から第13章で、「マタイによる福音書」の第13章45節以下の「天の国は」で始まるイエスの譬えに対する積義である。この積義自体は玉座に坐した学僧とも言うべきカールの個性を際立たせているが、自叙伝の構成から見ると叙述の流れを断ち切り、あまりにも不自然な印象を与える。だから、この聖書積義全文を削除してしまう校訂本もある²⁾。しかし、このいささか煩瑣な積義の行間から窺えるのは、カールの生に対する捉え方であり、第1章では十分に展開されなかったカールにとっての生の意味や目的である。つまり、冒頭で示された生に関する考察はこの聖書積義によって補完され、これら両者を併せて読み解くことにより、カールにおける生の表象の全体像が明らかになる。そこで、本稿では、自叙伝の根底にあるカールの人生観を理解する前提として、自叙伝の第11章から第13章を訳出する。そこからカールの生把握の全体像を浮き彫りにする作業は、紙幅の関係上、別の機会に譲ることとする。

ところで、カールを玉座に坐した学僧にたとえたが、自らの聖書積義を披露するほど学識豊かな君主は、ヨーロッパ史上でも稀有な存在であったと言ってよい。では、カールはそのような学識をいかにして習得したのであろうか。翻訳に先立ち、まずこの点について補足説明しておこう。

2. カールの教育

カールはチェコ王国のプラハに生まれ、フランスの宮廷で成長し、イタリアで政治の現実を学んだ。5か国語に堪能であったことをカールは自叙伝に記しているが、ヨーロッパ各地を転々としながら若き日々を過ごしたことを考えれば、カールが語学の才能に恵まれていたのもその遍歴の結果であったと言えるかもしれない。カールの学識形成は自叙伝の第3章に綴られ、それによると、後の文人皇帝の素地が培われたのはカールが少年時代を過ごしたフランスの宮廷においてであった。

カールは1316年チェコ王国の王都プラハに生まれ、洗礼に際してヴァーツラフと名付けられた。父親はルクセンブルク家出身のチェコ王ヨーハン(在位1310～1346年、チェコ語ではヤン)、母親はチェコ王国の民族王朝プシェミスル家の相続娘エリシュカで、ヴァーツラフは両者の嫡男であった。ヴァーツラフという洗礼名は、エリシュカの父の国王ヴァーツラフ2世(在位1278～1305年)に因んだものである。チェコ王国では1306年にエリシュカの兄である国王ヴァーツラフ3世(在位1305～1306年)が弑逆されてプシェミスル王家の男系が絶え、その後数年にわたり激しい王位争奪戦が繰り広げられた。その際に、当時の神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世(在位1308～1313年)は嫡男ヨーハンとエリシュカの結婚を画策し、チェコ王国をルクセンブルク家の支配下に置くことに成功した。ここにチェコ王国で、最初の外来王朝ルクセンブルク家による統治が始まる(1310年)。なお、ハインリヒ7世はルクセンブルク家出身の最初の神聖ローマ皇帝で、ダンテの『神曲』天国篇でアルリーゴ王として登場し、イタリアが生んだこの大詩人によって、世界に平和を実現し、わけても都市国家間と都市内部の抗争にあえぐイタリアに秩序と和

合を恢復する救世主と仰ぎ見られた人物である。このハインリヒ7世の孫であるカールもまた、今ひとりのイタリアの大詩人ペトラルカと親交があり、やがてペトラルカによって、古代ローマの栄光を復活しイタリアに平和をもたらすという壮大な夢を託されることになる。ハインリヒ7世がダンテにとってのFriedenskaiser（平和を実現する皇帝）であったとするなら、カールはペトラルカにとってのFriedenskaiser となるのである。

それはともかく、チェコ王国ではヨーハンの王位獲得によってルクセンブルク王朝の時代（1310～1437年）が始まる。だが、王朝成立当初、チェコ人にとってヨーハンはやそ者にすぎず、王権、貴族、都市の市民、聖界勢力のそれぞれの利害が対立して反目し合うところに、チェコ人とドイツ人との間の民族対立が複雑に絡み合っただけでなく、政争が絶えず、ヨーハンは王国内に強固な支配を打ち立てることができなかった³⁾。こうした政情不安の中でヨーハンが危惧したのは、王妃エリシユカを介してブシエミスル家の血筋を受けつぐ嫡男ヴァーツラフが国内の敵対勢力によって担ぎ出され、ヨーハンを王位から追い落とすことを企てることであった。そこで、ヨーハンは3歳になったヴァーツラフを家族から引き離し一人ブラハから人里離れた城に移して厳重な監視下に置き、ヴァーツラフと外界との接触を断った（1319年）⁴⁾。時には日の光のほとんど射さない城内の一室に押し込められることもあった半ば幽閉状態の中でヴァーツラフは幼少期を過ごし、こうした家族の情愛に恵まれない孤独で鬱屈した生活体験が、のちのカールの内省的で寡黙な少し夢想癖のある性向の形成に少なからず影響を及ぼしたかもしれない。やがて、ヨーハンは自分の嫡男でありながら脅威でもあった王太子をチェコ王国から遠ざけるため、フランス王国のパリの宮廷に7歳になったヴァーツラフを送った（1323年）。もっとも、当時、ルクセンブ

ルク家では嗣子たちをパリに送り教育としつけをその宮廷に託すのがしきたりとなっており、たとえば、ハインリヒ7世は日常フランス語を話し、ヨーハン自身もフランスの宮廷で騎士としての修業を積んだ⁵⁾。だから、ヴァーツラフをパリに送ったヨーハンの振る舞いは、ルクセンブルク家伝来の習わしに従う措置でもあった。

その当時、フランス王国を統治していたのはカペー王朝最後の国王シャルル4世（在位1322～1328年）であった。シャルルはすでにヨーハンの妹マリーアを王妃に迎えており、ヴァーツラフはこの国王夫妻から故国では決して味わうことのなかった親族による手厚い庇護を初めて受けることになる⁶⁾。ヴァーツラフがパリに到着して間もなく、シャルル4世はこの義理の甥に堅信札を渡し、自ら名付け親となって、シャルル（ドイツ語でカール、チェコ語でカレル）という自分の名をヴァーツラフに授けた。さらに、シャルルは、自分の叔父ヴァロワ伯シャルルの娘マルグリト（通称ブランシュ）と新たにカールと名づけることになったチェコ王国の王太子との結婚を取り計らい、フランス王室とルクセンブルク家との親族関係をさらに密なものにした（1324年）。この血縁によるフランス王室との緊密な結びつきこそヨーロッパにおけるルクセンブルク家の地位を高め、ヨーハンも、そして後のカールも、こうしたフランス王室との緊密な同盟関係を基軸に自分たちの家門勢力拡大政策（Hausmachtspolitik）を展開していくことになる。

パリの宮廷における少年カールの教育は、国王シャルル4世がカールに注ぐ格別な情愛に包まれながら行なわれた。シャルルは宮廷礼拝堂付き司祭をカールの教育係に任じ、学問の手ほどき、おそらくはラテン語とフランス語の読み書き⁷⁾を学ばせ、さらに聖母マリアの時禱書を毎日読誦するようにしつけさせた。この任に当たった宮廷礼拝堂付き司祭

の名前はわかっていない。中世ヨーロッパにおいて王侯貴族の子弟になされる教育は、文字の読み書きはさておきまずは一人前の騎士に育て上げることであり、カールの自叙伝によれば、シャルル4世自身も無文の人であった。したがって、カールの受けた教育は当時としてはきわめて異例で、そこに、いかなる意図があつたのかは定かでないがシャルルのカールに注ぐ特別な思いを感じ取ることができる。

しかし、カールがパリに到着して5年後の1328年、庇護の手を差し伸べてくれたシャルル4世が男児の嗣子なくして没してしまう。このシャルルの死をもってフランスのカペー王朝が断絶し、シャルルのいとこに当たるヴァロワ伯のフィリップ6世（在位1328～1350年）が、シャルルの姉の子でイングランド国王のエドワード3世の王位請求権を斥けてフランスの王位を襲い、新たにヴァロワ朝を開くことになった。この王朝交代劇によってフランス王国の王位継承は男系に限るという慣習が確立するが、周知のとおり、この交代は英仏百年戦争を惹き起こす原因となる。カールはまさに英仏百年戦争の前夜にパリの宮廷に居合わせ、そのきっかけとなる王朝交代劇を目の当たりにしたことになる。ところで、新たに即位したフィリップ6世はカールの妻ブランシュの異母兄で、だからカールとフィリップは義兄弟の関係にあつたが、自叙伝における国王としてのフィリップの振る舞いに対するカールの手厳しい評価⁸⁾を見ると、両者はどうやらそりが合わなかつたらしい。

フィリップが即位してなお2年間カールはパリに滞在し、その間に自分の人生を大きく左右する決定的な出会いを体験する。1328年の灰の水曜日に、フェカンのベネディクト派修道院長ピエール・ロジェール（Pierre Roger）がパリで説教を行ない、その流麗な雄弁で居並ぶ聴衆たちを魅了し去った。その

場に居合わせた聴衆の一人がカールで、自叙伝の記すところによると、この説教はカールの心をもすっかり奪い、12歳の少年を深い瞑想へといざなつた。これがいかに運命的な瞬間であつたかは、「この人から、かかる恩寵が余に注がれたのは何故であろうか」⁹⁾とカールが自問する言葉の中に表現されている。そして出会いの直後、さっそくカールはピエール・ロジェールの知遇を得、この聖職者の中に先王シャルル4世に代わる慈父のような庇護者を見出すことになる。このピエール・ロジェールこそこのアヴィニオン教皇庁の5代目教皇クレメンス6世（在位1342～1352年）で、この人物からカールはじかに聖書釈義の手ほどきを受けた。少なくとも自叙伝から読み取る限り、聖書に関する深い知識と聖書釈義の手法をカールに教えたのはピエール・ロジェールであり、両者の出会いこそ玉座に坐した学僧というカールの特異な個性の形成に決定的な影響を及ぼしたものと推測される。

なお、両者のこの子弟関係は、カールのその後の人生や物の考え方を大きく規定していく。カールとピエール・ロジェールの親密な関係はルクセンブルク家とアヴィニオン教皇庁との提携を強め、ルクセンブルク家—フランス王室—アヴィニオン教皇庁の固い同盟関係がやがてカールを神聖ローマ帝国の玉座へ押し上げていく原動力となる。また、ピエール・ロジェールはのちに教皇の座に昇りつめていく実際的で世知にたけた教会政治家であり、当時のスコラ哲学の思弁とは無縁で、もちろんローマ・カトリック教会の伝統的な教義を逸脱することはなかつた。こうした人物を師と仰いだカールも、学僧めいてはいても神学上の真理探究に身を捧げることはなく、またカトリック教会の権威を脅かすような革新的な思潮からは距離を置いた。こうした事情がカールの物の考え方に、いささか保守的な性格を与えた。この点は自叙伝で展開され

るカールの思想や聖書釈義から十分読み取ることができるであろう。

カールのパリ滞在は1330年で終わる。滞在中にパリ大学でも学んだという記録があるが¹⁰⁾ 定かではない。パリを離れて、14歳のカールは父王ヨーハンの指示でイタリアに赴き、その地で学識を磨くいとまもなく、激しい権力闘争の渦に巻き込まれていく。次章以下では、パリで土台を培った聖書釈義の具体例を紹介することにしよう。

3. 『自叙伝』第11章（翻訳）

ところでチェコに戻っていた折、余はボレスラフからトゥシャン¹¹⁾ に赴くことがあった。そして余が眠りに落ち入りかけたその時、「天の国は畑に隠された宝に似ている…」¹²⁾ というあの聖句がありありと浮かんできた。これは、聖女ルドミラの日¹³⁾ に読誦される箇所である¹⁴⁾。夢寐にこの句が浮かぶや、余はこの譬えの釈義を始めていた。目が覚めてもこの聖句の出だしの部分について思案したことが脳裏に残っていたので、神の恩寵の御加護により、「天国は…に似ている」で始まる聖句を余は最後まで考えてみることにした。

兄弟たちよ、聖なる福音書に語られていることを解き明かすなど何人もなしえぬところである。その示唆するところ甚だ深遠で、誰しもその高みを極め尽すことも、その意味を十全に明らかにすることもできないからである。そのことをパウロは書簡で、「ああ、神の富と叡智と知識の深さよ。その思召しはなんと窮め難く、その道はなんと測り難いことか」¹⁵⁾ と認め、同じく、「そもそも誰が主の御心を知り、いったい誰がその計らいにあずかったか」¹⁶⁾ とも語っている。にもかかわらず、神の御慈悲により天界から余に授けられた力の限りを尽くし—— というのも、ヤコブがその書簡に記すように¹⁷⁾、最良の贈

り物と完全な賜物は、すべて神の御慈悲により天界から授けられるものだから——、聖なる福音書のこの句を理解するため、あなた方に私見をいささか述べさせて欲しい。だから、もっとも親愛なるあなた方よ、余は切に願う。兄弟としてわが見解に耳を傾け、それを心に曇りのない純粋な気持ちで吟味して欲しい。

さて、マタイがくだんの譬えで天の国を畑に隠された宝になぞらえていることは、すでにお聴き願えた¹⁸⁾。ここで言う宝とは、間違いなく聖霊を意味する。この聖霊を人が見出すのはイエス・キリストの慈愛と恩寵によってである。ヨハネによる福音書で、キリスト自身が信仰篤き者たちに、「われはわが父に請い、父は別に助け手をあなた方に与えて下さるであろう。その助け手、すなわち、真理の霊が永遠にあなた方と共にとどまるためにである」¹⁹⁾ と約束されているからだ。さらにまた、くだんの宝が隠されている畑、あるいは土地とは、人の心を指す。この心には善き業と悪しき業の種を播き、のちにそれぞれの業は播かれた種に応じてその人の魂に実りを結ぶ。その一部については、ルカが「善き土地に落ちたとは、善き最良の心で神の言葉に耳を傾け、それを守り、忍耐して実を結ぶ人たちのことである」²⁰⁾ と示唆しているとおりだ。しかし、くだんの宝は、罪びとや後悔もせず懺悔の秘蹟さえ行なおうとはしない恥ずべき者たちには、まさしく隠されている。こうした者たちはかくて恩寵を見分ける眼を失い、盲目となってくだんの宝を見出すことができなくなってしまうのだ。こうした者たちのことを預言者は、「目はあっても見はしない」²¹⁾ と語っている。だが、まことに悔い改めた者は、先に述べたとおり、イエス・キリストの恩寵によってこの宝を見出す。なぜなら、詩篇の一節にあるように、「神は悔い改めへりくだる心を軽んずることはない」²²⁾ からである。むしろ、「主において楽

しめ。主は心に願うことをあなたに与えられるであろう」²³⁾と詩篇にあるように、神はその溢れんばかりの慈悲でいつも心を慰め励まして下さる。だが、悔い改めた人がこの宝を見出すや、その人は自分の心の中にそれを隠し、目を覚まし、畏れ慎んでそれを見張る。ペトロの言う「あなた方の敵」で「むさぼり食らう者を捜してさまよう」²⁴⁾悪魔が人の心からその宝を奪い去ってしまわないようにである。

このように解するなら、マタイによる福音書に、「あなたの右手がなすことを、左手に知らせてはならない」²⁵⁾と、記されていることも理解することができる。だがまた、聖句は「宝を喜ぶあまり急いで行き」と続くことに目を向けなければならない。これは、すみやかであること、つまり善き業はすみやかに行わなければならないことを言っているのである。そこで、ルカによる福音書に、「すみやかに町の通りと路地に出かけ、貧しい人たち、足の不自由な人たち、体の弱っている人たちを、ここに連れ来なさい」²⁶⁾とあるのだ。

さらに、くだんの譬えは、「宝を見出すやその人は出かけ持てる物すべてを売り」と続く。「持てる物すべて」とはその人の罪で、「売る」とは悪しき業を捨て去ることにほかならない。この表現は、ルカによる福音書に「その人は自分のすべての物を捨て去り」²⁷⁾と徴税人マタイについて記されていることや、「持てる物すべてを捨て去る者でなければ、わが弟子であることはできない」²⁸⁾と記されていることに一致する。この「売る」とか「捨て去る」という行為は、公の場において、しかも、どこでも好き勝手にではなく、もっぱら良心を裁く場において、もちろん、偽りなき告白、全き悔悛により、神からその場を任された聖職者の前でなされなければならない。「行って、あなた方を祭司たちに見せなさい」²⁹⁾というキリストの教えに従ってで

ある。ヤコブもその書簡でわれわれにこれを勧め、「互いにあなた方の罪を告白し合いなさい」³⁰⁾と言っている。

こうした悪しき業を「売る」とか「捨て去る」とかしたなら、その代りに必ずや、善き業を受け入れ、くだんの畑に、つまりは心に、保持しておかなければならない。そして、愛と忍耐をもってこの畑を保持し、そこにくだんの宝を隠しておかなければならない。その宝がそのままとどまり続けるなら、人は永遠にその宝を天の国に保持することになるであろう。マタイの言葉によれば、「あなたたちの宝を天に蓄えなさい。そこでは、虫も錆も害を及ぼすことはない」³¹⁾のである。

4. 『自叙伝』第12章(翻訳)

「天の国は良き真珠を求める行商人に似ている。高価な真珠の一つ見出したなら、出かけて行き、持てる物すべてを売って、それを買う」³²⁾。この譬えでまず注目されるべきは、真珠が、もっとも気品があり、透明な色をした、瑕ひとつない宝石だという点である。それゆえ、この譬えで、真珠は、秘められた解釈として、主の律法にたとえられているとするのが妥当であろう。主の律法には、気高く、清廉で、汚れのない、善き業があまた含まれているからだ。

また、福音記者の言う行商人とは、人そのものを指す。言うまでもなく、人はこの世の行路で翻弄されつづけ、さまざま難儀、幾多の苦難、この世の雑事に絶えず追われ、ヨブ記にあるように、同じところに決して永らえることはない³³⁾。だからこそ、人は商人と言われるのにふさわしく、くだんの高価な真珠、すなわち主の律法を見出そうと、絶えず求めてはさまよい、さまよっては求めつづけねばならない行商人になぞらえられるのだ。人はこのようにそれを求めてさまよい歩き、ルカがその福音書で、「求めなさい。そ

うすれば、見出すであろう」³⁴⁾と語るように、きっとそれを見出すであろう。ところで、この世でこのように求めて主の律法を見出すなら、人がそれをくだんの高価な真珠にたとえるのもっともなことである。前述のように、主の律法は、気高く、清廉で、汚れのない、善き、有徳の業にほかならないからである。だからこそ、くだんの人はこの真珠を「出かけて行き、持てる物すべてを売って、それを買う」のである。この真珠が「高価な」と言われるのも当然である。こうした律法の中にある神の戒めをその教えどおり忠実に遵守することほど、この世で価値ある大切なことはないからだ。ヨハネによる福音書で、「もしわれを愛するなら、わが戒めを遵守しなさい」³⁵⁾と語られるとき、このことを神がわれわれに命じることで教え諭されている。こうした神の戒めを遵守することによって、人は神に仕えたと見なされ、その結果、神の支配に与かることになるであろう。アウグスティヌスが「神に仕えることこそ、支配することだ」と語っていることや、同じく「神の律法とその律法に含まれる神の戒めを遵守する者こそ、神に仕え、神の支配に与かるであろう」と語っていることが、かくして理解することができるであろう³⁶⁾。

また、先に、譬えで言われていること、すなわち、くだんの人が出かけて持てる物すべてを売ってかか真珠を買うということは、われわれがいま仕事にあくせくしながら生きている束の間の人生そのものを意味している。この人生において、人はまさしく、今日から明日へとさすらい移ろって、日々ますます自らの死へと近づいて行く。だから、この人生そのものにおいて、人は持てるすべての罪、地上でのあらゆる欲望、肉なるものへの執着を、禁欲や他の善き業により自らを律することで売り払っておかなければならない。そして、それらの代りに、くだんの高価な真珠、すなわち神の律法を買い入れなければならな

い。この真珠をよく守り、かくして正しい道を渡って行くなら、その人は間違いなく祝福を受けることになるであろう。詩篇に、「道において汚れなく、主の律法を歩む者たちは幸いである」³⁷⁾と書かれているからである。こうして祝福され、汚れなく、気高い者は、天の国の門をくぐり抜けるであろう。高価な真珠の一つである、まさしくあの門をだ。門はその真珠の威力、すなわち主の律法の威力でたちどころに開かれ、その時、人は真珠そのものの威力を目の当たりにするであろう。真珠は聖都イェルサレムの諸門を構成し、人はその時、その門をくぐってこの聖都に入るのである。聖都とその諸門については、ヨハネが黙示録で触れ、「都の十二の門は十二の真珠であり、おのおのの門は一つの真珠からなっていた」³⁸⁾と語っている。

5. 『自叙伝』第13章(翻訳)

「天の国は海に投げ入れられ、あらゆる種類の魚を集める網に似ている」³⁹⁾。「網」とは神の御言葉であると、われわれは解することができる。それを投げ入れたのは、使徒たちであった。マルコによる福音書で、「全世界に行き、造られたものすべてに福音を宣べ伝えなさい」⁴⁰⁾と、使徒たちに命じられたからである。さらに、この「網」は使徒たちによって「海」に投げ入れられたとあるが、「海」とはこの世界のことである。そのことは、使徒たちに「全世界に行け」と告げられたところから明らかだ。ここで、全世界がとくに「海」と比喩で表現されているのにはそれなりのわけがある。というのも、海は、決して休むことなく、寄せては返す流れによって流転してやまず、大波や暴風で、海に漂う船乗りたちを、あちらへ、こちらへと追い立て翻弄する。そのように、この世界も変転きわまりなく、その波間に漂う者たちを罫や危険が待ち受け、つねに不安へと駆りたて責め

苛むからである。難破へと追いやるこの海でこうした窮地にさらされた預言者は、「神よ、われを救い給え。水がわがのど元にまで押し寄せて来ました」⁴¹⁾と主に向かって叫んだ。さらに、「奔流や海の嵐がわれを呑み込むことのないように」⁴²⁾ともだ。この嵐は、この世界の危難を指す。預言者がここで、危難を嵐と、世界を海と表現しようとしていることは疑う余地がないからである。

さて、この譬えで、「魚」とは人を意味する。マタイによる福音書に、「わがあとに従いなさい。あなたたちを漁る者としてよう」⁴³⁾とあるからだ。他にもルカによる福音書で、主はベトロに、「懼れてはならない。あなたは今からのち、人を漁る者となるからだ」⁴⁴⁾と語られた。さらに、先の譬えでは、「あらゆる種類の魚」、すなわち、あらゆる種類の人を「集める」と言われている。人は、民族や、身分や、境遇もまちまちで、善人もいれば悪人もいる。くだんの「網」、すなわち、神の御言葉は、こうした人間たちすべてを集めて囲い込むゆえ、このように言われているのである。それは、使徒言行録に語られているように、神の御言葉がユダヤ人たちのみならず異邦人たちにも、かくて、人類全体にひとしく伝えられたからである。ところで、主の御言葉が伝えられたのは、詩篇に「その声は全地に広がる」⁴⁵⁾と詠われた使徒たちによってであった。また、それは、智者が「全世界に満ちる」⁴⁶⁾と語る聖霊によってでもあった。さらにまた、われらの救い主自身によってでもあった。主は自ら救いをもたらさんとこのような御言葉を世界に播き弘めたからである。だから、ヨハネによる福音書で、主は、「われが来て語らなかつたなら、彼らに罪はないだろう。だが今はその罪を言い逃れる余地はない」⁴⁷⁾と語られるのだ。さて、この御言葉は満たされねばならない。それゆえ、先の譬えで、網が「満ちれば」と続くのである。その御言葉によって主とその聖なる人たちの

口から告げられたすべてのことがひとつ残らずすっかり成就する時、くだんの網、すなわち御言葉は満たされることになる。マタイによる福音書に、「律法の一点一滴も消え去ることはない」⁴⁸⁾とあり、また、ルカによる福音書に、「これらのことごとくが成るまで、今の代が過ぎ去ることはない。天地は過ぎゆくとも…」⁴⁹⁾とされているからである。

さて、くだんの網、すなわち、神の御言葉が満たされた時、その御言葉に従った聖なる者たちとその御言葉ゆえに悪とされた者たちとの数もひとしく直ちに満たされることになるであろう。黙示録において、ヨハネが幻を視て、こう語っているようにである。「神の言葉ゆえに、それを守ったがゆえに命を落とした者たちの靈魂を神の祭壇の下に視た。彼らは大声をあげて言う。『聖にして真なる主よ、いつまで、地に住む者たちにわれらの血の復讐をなさらずにいるのでしょうか。すると、そのひとりひとりに白い衣が与えられ、命を落とすことになる彼らの兄弟たちの数が満ちるまで、なおしばらく安らかにしていなさいと、彼らに告げられた。』」⁵⁰⁾

網、すなわち御言葉と、くだんの者たちの数が満たされた後、世の終末と最後の審判の日がやって来るであろう。福音記者が先の言葉で、「世の終わりにもこうなる…」と示したようにである。そして、その審判の時、くだんの満たされた網が引き上げられるであろう。だから、「引き上げ」と言われている。網を引き上げるのは、その網を投げ入れたのと同じ人たち、つまり、使徒たちであろう。そして、使徒たちは、網、すなわち、我々の間に種播いた御言葉を、畑と種から成った実もろとも引き上げる。引き上げると、網は溢れている、すなわち、良き実と悪しき実で「満ち」ているであろう。良き実とは神の御言葉をよく実らせた義人、悪しき実とはそれを腐らせた悪人のことだ。ルカによる福音書に、「人は播いたものを、また刈り取るであろう」

51) とあり、詩篇にも、「涙とともに種播く者は、歓喜とともに刈り取るであろう」⁵²⁾ とあるとおりで。使徒たちも我々に種播いたのだから、我々から刈り取り、引き上げるであろう。

ところで、使徒たちが我々を引き上げるのには、くだんの綱についている四本の綱によってであろう。実際の綱が、同じく四本の綱で手繰り寄せられるのに似ている。つまり、どんな綱にも四本の綱がついており、その二本は水面より上に伸び、残りの二本は水面より下に浸かり、水面下の二本は水面上の二本と対をなしている。水面下の右にある綱は水面上の右にある綱と、水面下の左にある綱は水面上の左にある綱と対をなすという具合にである。くだんの霊なる綱もそのとおりで、同じく四本の綱がつき、それらの綱によって人はひとり残らず引き上げられることになる。すなわち、その二本は、天界を漂って神の側から伸び、言うまでもなく、恩寵と神威を表わす。残りの二本は、下界を漂って我々の側から伸び、明らかに、敬愛と憎悪を意味する。天界からの一本目の綱、つまり、神の恩寵と、下界からの一本目の綱、つまり、敬愛とが対をなし、この良き二本の綱で義人が引き上げられる。天界からの一本目の綱については、ヨハネによる福音書で、恩寵により、「わが父が引き上げないなら、誰もわが許に来ることはできない」⁵³⁾ と、主が語られている。いま一方の綱についても、ヨハネによる福音書に、「もしわれを愛する者がいれば、わが父もその人を愛し、われらはその人の許に来て」、すなわち、敬愛と熱愛に引き寄せられて、「その人のところにとどまることになるであろう」と語られている⁵⁴⁾。詩篇に言われる「綱はわがためにいと麗しきところに落ちた」⁵⁵⁾ という句も、こうした二本の綱について語っていると、解することができる。

同じように、天界からの二本目の綱、すなわち、神威には、下界からの二本目の綱、す

なわち、憎悪が対をなし、悪人はことごとくこれらの綱で引き上げられる。ヨハネによる福音書に語られるように、「悪をなす者はすべて光を憎むからである」⁵⁶⁾。そして、神威は、先の義人たちに対してよりも、こうした悪人たちに対してこそ必要とされる。なぜなら、義人たちは、褒美を期待し、自ら進んで審判に出頭するからである。だが、悪人たちは永劫の罰を恐れて審判を避け、黙示録にあるとおり、「洞穴と山々の岩間に隠れ、山と岩に向かい、『われらの上に墜ちて、御座に坐すお方の御顔より、小羊の怒りより、われらを隠してくれ。神と小羊の大なる怒りの日が来るからだ。誰が耐えられるであろうか』と言うであろう」⁵⁷⁾。それゆえ、嫌がる彼らを引っぱり上げるため、神威が必要なのだ。

「空中でキリストに出会うために、われらはことごとく」、神の力によって、「引き上げられるであろう」という使徒の言葉⁵⁸⁾も、その一本の綱、すなわち、神威について語っていると解することができる。また、「われが地より挙げられる時」、力によって、「すべてのものをわが許に引き寄せよう」⁵⁹⁾ という福音書の救い主の言葉でもある。二本目の綱について、列王記には、「サマリアに用いた縄とアハブの家に用いた重石をイェルサレムの上に伸ばすであろう」⁶⁰⁾と記されている。また、これら神威と憎悪の綱ついて、詩篇では、「罪びとへの綱がわれに絡みついた」⁶¹⁾と、言われている。

こうして、使徒たちにより、人はことごとくくだんの綱で引き上げられるであろう。使徒が語るように、肉において我々がなした行ないの報いを受けるため、「われらはみな神の審判の座の前に立つ」⁶²⁾からである。我々が引き上げられるのは「岸辺」であり、「岸辺」とは、全能の神の審判の座である。この審判の座が「岸辺」になぞらえられているのも当然である。「岸辺」が船で旅する者の終着点であるように、この審判の座もこの世を

漂うあらゆるものの終着点でもあれば目的地でもあるからだ。さて、我々を引き上げたのち、使徒たちは「岸辺」に沿って、すなわち、審判の座に、坐することになるであろう。福音書で、「人の子がその栄光の座に坐するとき、汝たちもまた十二の座に坐してイスラエルの十二の部族を審くであろう」⁶³⁾と、救い主が語られているようだ。そして、使徒たちはわれらの主のために裁き、「善きものを器に選り分ける」。これは、主の正しい裁きによって、義人たちを、平和と悦楽のある「永遠の住居」に加える⁶⁴⁾ということだ。しかし一方、使徒たちは「悪しきものを外に投げ捨てる」。これは、悪人たちを、「悲嘆と菌がみが沸き上る」永遠の地獄へ断罪するということだ。こうした判決は、神の言葉でなされる。マタイによる福音書に記されているように、神は義人に対して、「わが父に祝福された者たちよ、来て国を受け取るがよい」⁶⁵⁾と言ひ、悪人に対して、「呪われた者たちよ、永劫の火の中に入るがよい」⁶⁶⁾とすることによってである。こうして裁きが終わると、天使たちが、廷吏にして下された判決の執達吏のように、くだんの福音書の言葉に続くとおひ、すみやかに、「義人たちの中から悪人たちを分かち、業火の炉にその者たちを投げ入れる」。詩篇に、「主を誉めまつれ。主のすべての御使いよ、主の話す声を聞き主の言葉を果たす力強い勇者たちよ。主を誉めまつれ。主の御心を果たし主に仕えるすべての勇者たちよ」⁶⁷⁾とされているように、天使たちこそ、神の言葉の奉仕者だからである。

ところで、くだんの譬えに、「『汝たちはこれらすべてが解ったか』と尋ねた。弟子たちは主に『解りました』と言った」⁶⁸⁾と続く。これらの言葉は、問答である。くだんの三つの譬えを弟子たちに示すと、「汝たちはこれらすべてが解ったか」という言葉で、主が彼らに問うたからである。ただし、主が弟子たちにこう問うたのは、彼らの理解を疑ったか

らではない。事前に、主は万事を見通しているからだ。そうではなく、主は問うことで、弟子たちの理解を、御自身の知識にまでいっそう高めようとなされたのである。このことは、マタイによる福音書にペトロの姿をとおして、我々にはっきりと示されている⁶⁹⁾。「人々は人の子を何者と言っているか」と問われ、ペトロは、「あなたはキリスト、活ける神の子です」と答えた。すかさず、「汝にこれを示したのは血と肉ではなく、天にいるわが父である」と、主は言われた。問答によって、弟子たちの理解がいかによろこば高められたかは、このとおひである。そこで、弟子たちは間をおかずに、「主よ、解りました」と答えたのである。かくして、主は弟子たちの理解が深まったのを見て、また、彼らが自らの聖なる教えの言葉を吸収することに熱心であることを考え、彼らをさらにいっそう導き誘おうと思われた。そこで、彼らに褒美として天の贈り物を約束し、「それゆえ、天の国につうじたすべての智恵ある学者は、自分の倉から新しきものと古きものを引き出す一家の主人に似ている」と、主は語られた。さて、主が智恵ある学者と言うのももっともなことだ。智恵ある学者とは、言説を言葉で説くのみならず、義しい生きざまの手本を示すことにより、人々を導き教化する者のことである。なぜなら、理屈を並べても実践しない者は、なるほど学者とは言われようが、智者とは呼ばれないからだ。マタイによる福音書に、「学者とファリサイ人たちがモーセの座についた。彼らの教えは行いなさい。彼らの行いはまねてはならない」⁷⁰⁾とあるとおひだ。このように、彼らは学者と呼ばれても、智者とは呼ばれていない。それゆえ、すべての学者がというわけではなく、智恵ある学者のみが、「自分の倉から新しきものと古きものを引き出す一家の主人に似ている」のである。「倉」とは、すなわち、営々と蓄えられた富のことである。そこで、一家の主は、好機を

見計らい、あるいは、必要に迫られて、地上での栄光を求めては、自分の倉から、新たに蓄えた新たな富を、以前から蓄えてあった古い富を引き出す。それに似て、智恵ある学者も、天なる故国での栄光を勝ち得ようと、その聖なる説教と知識で他人を教え義へと導くため、聖霊に注ぎ込まれて自分の心に蓄えた富から、新約聖書と旧約聖書の奥義を引き出し、有益な解説を施す。なぜなら、智恵ある学者とは、まさしく、ダニエル書に「智恵を得て、あまたの人々を義へと導く者たちは、星のようにいつまでも永遠に輝き続ける」⁷¹⁾と語られる人たちだからである。

註

- 1) Karl IV ., Vita Caroli quarti, cap.3.
- 2) J.F.Böhmer, Vita Karoli quarti imperatoris ab eo ipso conscripta, In: Fontes Rerum Germanicarum 1, Stuttgart,1843,S.228-270.
- 3) E.Werunsky, Geschichte Kaiser Karls IV . und seiner Zeit, Band 1, Innsbruck, 1880, S.2-6. E.Werunsky のこの3巻本は、古くはあるが、当時の史料から再構成された最も詳細なカール4世に関する伝記である。
- 4) ibid, S.6-7.
- 5) ibid, S.11.
- 6) シャルル4世がヴァーツラフに注いだ情愛は、Karl IV ., Vita Caroli quarti, cap.3. に詳しい。
- 7) E.Werunsky, op.cit., S.14.
- 8) Karl IV ., op.cit, cap.3
- 9) ibid.
- 10) E.Werunsky, op.cit., S.25.
- 11) いずれもプラハ近郊にあったと推測される。
- 12) 「マタイによる福音書」13.44 以下。
- 13) 9月16日
- 14) ここで語られる出来事が、1338年の聖女ルドミラの日(9月16日)か、その前後に起きたことを暗示しているであろう。
- 15) 「ローマの信徒への手紙」11.33.
- 16) 「ローマの信徒への手紙」11.34.
- 17) 「ヤコブの手紙」1.17.

- 18) 第11章で釈義されるのは「マタイによる福音書」13.44で、この節を全訳すると以下のとおりである。
「天の国は畑に隠された宝に似ている。それを見出すや人は隠し、それを喜ぶあまり急いで行き、持てる物すべてを売って、その畑を買う。」
なお、この訳出は、ラテン語訳聖書ウルガータから行なった。言うまでもなく、ウルガータは4世紀末から5世紀初頭にかけてヒエロニムスによりヘブル語とギリシア語からラテン語に翻訳された聖書で、中世のローマ・カトリック教会共通の聖書として流布した。カールもまたこのウルガータに基づいて聖書釈義を行なったものと思われる。
- 19) 「ヨハネによる福音書」14.16-17.
- 20) 「ルカによる福音書」8.15.
- 21) 「エレミヤ書」5.21.
- 22) 「詩篇」51.19.
- 23) 「詩篇」37.4.
- 24) 「ペトロの手紙 一」5.8.
- 25) 「マタイによる福音書」6.3. 右手は忠誠の証して、左手は邪悪さを象徴する。
- 26) 「ルカによる福音書」14.21.
- 27) 「ルカによる福音書」5.28.
- 28) 「ルカによる福音書」14.33.
- 29) 「ルカによる福音書」17.14.
- 30) 「ヤコブの手紙」5.16.
- 31) 「マタイによる福音書」6.20.
- 32) 「マタイによる福音書」13.45-46.
- 33) 「ヨブ記」14.2.
- 34) 「ルカによる福音書」11.9.
- 35) 「ヨハネによる福音書」14.15.
- 36) カールがアウグスティヌスのどの著作から引用したかは定かではない。
- 37) 「詩編」119.1.
- 38) 「ヨハネの黙示録」21.21.
- 39) 「マタイによる福音書」13.47. この章で釈義される13.47から13.50をウルガータから全訳すると、以下のとおりである。
「天の国は海に投げ入れられ、あらゆる種類から集める網に似ている。満ちればそれを引き上げ、岸辺に坐して善きものを器に選り分け、悪しきものを外に投げ

捨てた。世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、義人たちの中から悪人たちを分かち、業火の焔にその者たちを投げ入れる。そこでは、悲嘆と歯がみが沸き上るであろう。」

- 40) 「マルコによる福音書」 16.15。
 41) 「詩篇」 69.2。
 42) 「詩篇」 69.16。
 43) 「マタイによる福音書」 4.19。
 44) 「ルカによる福音書」 5.10。
 45) 「詩篇」 19.5。
 46) 「知恵の書」 1.7。
 47) 「ヨハネによる福音書」 15.22。
 48) 「マタイによる福音書」 5.18。
 49) 「ルカによる福音書」 21.32-33。「天地は過ぎ行くとも」のあとに、「わが言葉が過ぎゆくことはない」と続く。
 50) 「ヨハネの黙示録」 6.9-11。
 51) 「ルカによる福音書」ではなく、「ガラテアの信徒への手紙」 6.7からの引用である。
 52) 「詩篇」 126.5。
 53) 「ヨハネによる福音書」 6.44。
 54) 「ヨハネによる福音書」 14.23。
 55) 「詩篇」 16.6。
 56) 「ヨハネによる福音書」 3.20。
 57) 「ヨハネの黙示録」 6.15-17。
 58) 「テサロニケの信徒への手紙 一」 4.17。
 59) 「ヨハネによる福音書」 12.32。
 60) 「列王記 下」 21.13。
 61) 「詩篇」 119.61。
 62) 「ローマの信徒への手紙」 14.10。
 63) 「マタイによる福音書」 19.28。
 64) 「ルカによる福音書」 16.9。
 65) 「マタイによる福音書」 25.34。
 66) 「マタイによる福音書」 25.41。
 67) 「詩篇」 103.20-21。
 68) 「マタイによる福音書」 13.51。ここで釈義される13.51-52をウルガータから全訳すると、以下のとおりである。

「『汝たちはこれらすべてが解ったか』と尋ねた。弟子たちは主に『解りました』と言った。主は続けられた。『それゆえ、天の国につうじたすべての智慧ある学者は、

自分の倉から新しきものと古きものを引き出す一家の主人に似ている』。

- 69) 「マタイによる福音書」 16.13-17。
 70) 「マタイによる福音書」 23.2-3。
 71) 「ダニエル書」 12.3。